

Title	國語國文から觀た福澤先生
Sub Title	
Author	高橋, 龍雄(Takahashi, Tatsuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.3 (1934. 11) ,p.35(381)- 63(409)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19341100-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

國語國文から觀た福澤先生

高橋 龍雄

今回塾祖福澤先生誕生一百年紀念の行はれるに際し、「史學」の特輯號を刊行されるに就て、表題の如き一小論文を掲載させて戴くことは、誠に私の光榮とする所である。

「英雄にあらざれば英雄を知らず」といへるが如く、明治の一大先覺者福澤先生を知るには、苟も福澤先生ほどの偉大な卓見と廣汎な常識とを備へてゐる者でなければ、先生を知ることが出來ないのである。先生に關する著述論評の類、頗る多いのであるが、所謂群盲象を探る形で、或者は拜金宗の大和尚といひ、或者は歐米思想に偏して國史の忠臣を抹殺したものだといひ、又先生の崇拜家も、唯大經綸に富んだ大經世家であつたといひ、或は單に町人諭吉と題して記述し、或は最も常識に富んだ文筆家もしくは教育家であつたといひ、或は獨立自尊の標語を唯個人主義のもの、やうに解釋してゐる者もある。何れも群盲が大象を手探りながら、或者は其鼻を捕へて、象は軟くして長きものだといひ、或者は其足を捕へて、象は堅くして柱の如きものだといひ、或者は其尾を捕へ、又は肩の一部、腰の一部を撫で、象

の何たるかを評定してゐるやうな者ではなからうか。

殊に私共、國語國文といふ最も狭い學問から、偉大なる福澤先生を觀ようとするのであるから、管見中の管見で、殆ど採るに足りない、漫言贅語であることは、私自身に能く自覺してゐるのである。唯我々國語國文界の人々に、永い間誤解せられ、今もなほ先生が國語界の一大恩人であつたことに氣付かない者が多いやうであるから、此の機會に於て、私が平素抱懷してゐる愚見の一端を披瀝して、斯界の人々の教示を仰ぎたいと思ふ。

即ちこの拙ない小論文をば、次のやうな順序で述べてみよう。

- 一 國語國文に對する社會の認識不足
- 二 先生の國語國文と其の影響
- 三 先生の文章の底に流れてゐるもの
 - 1、愛國の熱情
 - 2、大悟徹底の人生觀

一 國語國文に對する社會の認識不足

國語と和語と、和文と國文と、の區別を、第一に認識すべきである。國語國文は、和語と漢語とを交

へたもので、所謂和漢混和の言語文章である。而して和語和文は、固有の大和言葉を主として、王朝時代の女流文學に範を取つて、漢文口調を排し、漢語の使用をなるべく避けようとするものである。

徳川時代の中期、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤などの和學者皇學者が輩出してから、擬古文といふ王朝女流の和文が、其派の人達の間には一時流行したけれども、當時の一般社會の法令文書牘文などには、嘗て用ひられず、新井白石、室鳩巢、荻生徂徠などの書いた、所謂和漢混和文といふものが、一般社會の通用國語文であつた。然れども儒者の文、動もすれば拮屈贅牙の漢文體に流れて、世俗の實情とは甚しくかけ離れたものであつた。そこで戯曲小説、即ち俗文學といふものが、民間に發達し、人情の機微を遺憾なく描寫して、大衆の心に訴へ、民衆の血を湧かせたのである。由來言語文章に雅俗の別を立てることは、時代の新古に因てのみ定むべきではない。

王朝時代に出來た、源順の倭名鈔にも、語の解釋に、俗言を併記してをる。然るに徳川時代の國學者は、王朝語を雅言として尊び、日用の口語を俗言として賤しめてゐたのだ。この誤つた考が、所謂和學者國學者といふ者の間に深くこびり付いてゐたので、明治の御一新に際し、國語國文の教科書が、頗る古臭いものであつた。

和文では「本朝文範」等の如き擬古文であり、文法では「語彙別記」等の如き、春庭の「詞の八衢」の燒直しに過ぎないので、社會の實際とは全くかけ離れてゐる者であつた。極端にいへば、死んだ古典

語を國語國文と稱し、活きた口語を俗語として賤む考は、やはり徳川時代其儘であつた。

帝國大學で、國語の文法を合理的科學的に教へたのは、英人チャンパーレンで、芳賀矢一博士も、上田萬年博士も、この講義を聞いて、初めて國語の體系的語法を悟られたといふことだ。其他コックスやアストンの如き外人が、盛に日本の俗語文法を研究して、日本文典の何たるかを知らしめたので、國學者も初めて氣付いて、日本俗語文典が、前波仲尾、松下大三郎、石川倉次、金井保三、入江祝衛、鈴木暢幸諸氏の著述となつて現はれた。之は明治三十四年から、三十五、六年にかけての事である。

之より先き、言文一致といふ語が、物集高見博士に因て唱へられ、言語と文章とが、如何なる點で一致すべきかが問題となつた。尾崎紅葉、幸田露伴氏の如き、二大文豪の間に、「である式」「だ式」「です式」などの是非が鬭はされてゐた。しかし未だ何人も口語文が即ち活きた日本語であるといふ考は起らなかつたのである。

明治三十三年に小學校令が改正になり、小學讀本中に、口語のまゝの文を入れたのを、或る家庭の子供が節をつけて讀んでゐると、其父兄は怒つてその子供を擲つたといふ話もある。之は苟も「本」にある文章は、雅言文章で、俗語口語の如きは、甚だ野卑低劣なものである、といふ社會一般の常識が残存してゐたことを物語るものである。つまり社會の人々は、國語國文に對する正確な認識を持つてゐなかつた。

福澤先生は、かゝる時代に於て、所謂吾が草する文章は俗文であることを堂々と自唱しながら、「三十谷人」の印章を用ひ、(註、三十一は「世」の字、谷人は「俗」の字を分解したもの)魂の抜けた虚偽的の和漢學者の衒學的文章に向つて、侃諤の論陣を張つて鬪はれたのだ。中津藩士の高谷龍洲先生が、先生の文は俗文だから嚴格な漢文調に改めるやうに、との忠告を一蹴せられたのも、之が爲だ。

二 先生の國語と國文

先生の國語は、活きた國語であつて、死廢の古典語ではない。其故に口語に對しては、常に多大の注意を拂はれてゐたのだ。

明治二十年十一月の時事新報に、先生の芝居論が出てをる。その一節に

爰に我等が文壇の一士人として芝居の見物に利する所を云へば、鳴物に非ず、立廻り所作にも非ず、唯有益なりと思ふ所は、淨瑠璃の文句と、殊に其の掛合、せりふの妙處に在るのみ。……凡そ文士が文章を草するに、達意を主とすといへば、甚だ容易なるが如くなれども、其間に一字一句を等閑にすべからず。……凡そ人と語るに、其人の種類を問はず、假令下流卑賤の男女にても、其偶然に發する所の一話一笑を輕々に聞かずして、其言語の用法に注意すれば、以て吾が師とす可きものなり。

とあるが如く、先生は平常人々の談話に注意し、國語口語の眞髓が、いかなる言葉で表現されてゐるかに、多大の關心を持たれ、先生自らの言語にも、彫琢洗鍊を加へられてゐたので、先生の言葉は、即ち立派な文章であつたのだ。石河幹明氏の福澤諭吉傳の中に、「先生の言と文」と題して

全體先生の談話は、六つかしい語法など用ひらるゝ事なく、極めて通俗な辭で、然かも滔々口を衝いて出ると云ふ有様でありましたが、不思議な事には、其通俗滔々の辯舌が其儘文をなして、殆ど一言一句も抜きさしのならぬやうに整うて居る。

と書かれてゐる。

先生が國語口語を尊重されてゐたのは、餘程ふるい時からである。「明治七年六月七日集會の演説」が福澤全集緒言に出てゐる。而して先生の國語尊重の熱誠は、遂に日本最古の演説館となつて現はれ、その建造物は、今や東京府特別保護建造物として、三田の山上に保存されてゐることは、餘りにも周知の事實である。

當時は、日本語を輕蔑して、到底演説などは出來ない野蠻語であると思はれてゐたのだ。先生の文に由ると、「就中森有禮氏の如きは、年は少かけれども、異論を唱へ、西洋流のスピーチュは、西洋語に非ざれば叶はず、日本語は唯談話應對に適するのみ、公衆に向つて思ふ所を述ぶ可き性質の語に非ず云々など、反駁するゆゑ、余は之を反駁し云々」と見えてゐる。

その森有禮氏が後に文相となられたのであるが、氏は日本語を廢して英語にしようとならんと企圖せられ、私共丁度其時、中學の二三年生であつたので、御蔭で地理、歴史、代數、幾何、悉く原書で習ひ、答案はすべて英文で書かせられた爲に、今日幾分でも英書を讀破する力を得たのであるが、森氏はこの日本語廢止説を主張して、遠く歐米に赴かれても、その主張を憶面もなく、有名な言語學者の間に吹聴されたのである。

米の言語學の大學 William Whitney は、最も懇切にその無謀を戒め、又自國語を滅して外國語を採用せんとするが如き無謀の暴舉は、到底成し遂げられるものではないのみならず、國家の基礎をも危うするものである、との忠言を呈されたのである。又英の言語學の泰斗 Henry Sayce は、其の著 *Introduction to the Science of Language* の中に、森有禮が自國語を廢して英語とするといふのは、大膽極まるもので、古今未曾有の愚かな大計畫であると、冷笑したのだ。又英の梵文學の泰斗 Max Müller 博士の如きも、この森氏の企圖に對しては、頗る不贊成であることを論斷したのである。

もし森氏が、夙に福澤先生の日本語演説に於て、先生の説に傾聽し、日本人は日本國語を持ち、日本語で立派に演説も出來、文章も書けるものであることを確信してゐられたらば、前記のやうに、むしろ國辱的の侮蔑を、外國の言語學者から受けられなくても濟んだことであらう。

次に先生の國文といふのは、やはり活きた國語を寫すもので、實用的實際的のものである。而して文

明の宣教者として、迷へる日本人を啓發せんが爲に、勉めて通俗平易な文を書かれたのだ。先生が蓮如上人の御文を見て、眞宗の教義が大衆に徹底したのは、この平明な國文であることに氣付かれたので、眞宗の御文を模範とせられたことは、先生自身の文にも見えてゐるが、漢籍の左傳に模範を採られたことは、井上圓了博士の隨筆に、博士が自ら先生に問はれた時の記事として、次のやうな記録がある。

福澤翁の文章談

井 上 圓 了

余嘗て福澤翁を訪ひ、その文章談を聞くに、翁曰く、「余は幼より達意の文章を學ばんと欲し、これを漢學者に問ふに、達意の文は左傳に如くはなしと聞き、爾來左傳を反覆し、殆ど暗誦するに至り、更に佛學者に問ふに、通俗をして解し易からしむるには、蓮如上人の書帖の御文を學ぶにしかずと聞き、爾來また御文を暗誦し、この二者によりて余が文章を得たり」と。

果して然らば、福澤翁の文章は、左の算式を以て表示することを得べし。

左氏文+蓮師文=福澤文

余も、文章はなるべく通俗をして解し易からしむるにあるを知り、心竊に平田篤胤、頼山陽および福澤翁の三文章を調査して、おのれの文章を定めんと欲し、一時この三氏の文章を愛讀せしことありき。今日いまだその調査を完成したるにあらねども、もし調査し得たりとなさば、左の算式を以て表示することを得べし。

頼文 + 平田文 + 福澤文 = 井上文

もし、之を前式に照合すれば、

頼文 + 平田文 + 左氏文 + 蓮師文 = 井上文

之を要するに、今日の急務は、漢文の上に一大革新を斷行し、之をして實用に適せしむるにあり。

(圓了隨筆)

思ふに、國文に於ては眞宗の御父、漢文に於ては左傳が、先生の文章の狙ひ所であつたのだ。何故御文の外に左傳を採られたか、今から付度することは出来ぬが、私の臆測に據れば、由來日本文の弱點は冗漫に流れ、贅語に陥り易いので、頗る引締つた、一言一語も抜きさしの出来ない文の模範としては、左傳が最も宜しい、とせられたのではあるまいかと思はれる。

而して先生の文章を評した著作の多い中で、私が最も感服してゐるのは、故原敬首相の文である。原氏は夙に新聞記者として、文章の推敲鍊磨に多大の體驗があり、又その鋭利な觀察と緻密な批評眼とが、普通一般の文士と異つて、眞に先生の文章を洞察してゐるやうに思ふが故に、長文ながら其全文を次に掲げる。

福澤先生の文章

原首相談

故福澤先生が、日本の文明に貢獻された功績は、指を屈するに暇なきまで多きが中に、其最も著

大なるものは、慶應義塾と時事新報の二事業であらう。先生の卓見に就ては、私の常に畏敬して措かざる所であるが、茲には唯だ先生の文章に就て、聊か感想を述べて見やうと思ふ。

先生以前は、大體に於て漢文を主とし、假名交り文を書く者でも、漢文直譯のスタイルを用ひて居たものであるが、先生は此漢文體を充分に日本化し、明治時代に於ける標準の日本語とも謂ふべき文體を創作された。私は故井上毅子が、先生の文章を賞揚して居たのを屢聞いたが、勿論井上子と先生とは、思想上に於ては懸隔があつたのであるから、井上子が先生の文章を賞揚したのは、其内容ではなく文章其ものに就て言つたことだらうと思つて居る。尤も先生の立論は、正々堂々として、聊かも私心を挿まぬ點に就ては、井上子も敬服したことだらうと思ふが、要するに井上子は、先生の文章に對し、深き尊敬を拂つて居られた。

當時の學者文章家輩の多くは、漢文を宗として居たので、純粹の日本語を卑俗なりと排斥し、文章に使用すべき語ではないと思つて居たものである。尤も英文にせよ、佛文にせよ、俗語を取り入れるに際しては、充分に注意を拂ふべきことで、成るべく卑俗の言語は之を使用しないのであるが、當時の日本語では、俗語と見做された範圍が餘りに廣かつたのである。夫れは前に述べた通り、漢語を主として、純粹の日本語を俗語と見做したからだ。

福澤先生の文章を見るに、純粹の日本語を細心に取捨撰擇して、下品な語を斥け、上品な語を用

ひ、以て從來の漢文體の文章を巧に日本化してある。之は天才でなければ出來ないことだ。一茶の俳句の如きは、巧妙に俗語を用ひた所に、獨特の新しい味があるのであるが、俗語を下手に用ひれば、狂句や川柳になつて仕舞ふであらう。此意味に於て、福澤先生の文章は、一茶の俳句であると言つて可からう。

先生は、其新しき思想を表現するに、此新しき文體を以てせられ、遂に其文體が明治時代の標準となつて、今日では敢て珍らしいとも感せぬやうになつたけれども、まだ漢文臭味の文章があつて、新聞紙の論文中にさへ、三四十十年前の先生の文章より古臭いものがある。先生の文章は、少しく助辭を口語體に直せば、直に今の言文一致體になるのであるが、今の新聞紙の論文中には、辭を口語體に直した位では、言文一致にならぬものがある。其れは、其文章が日本語と根本に語脈が違つて居るからだと思ふ。例へば、「何々せんばあらず」とか、「何々すべけんや」とか、斯やうな語は、日本語の語脈ではない。是を「何々すべけんやだ」など、言文一致流に書く者があるのは、滑稽である。要するに、福澤先生の文章が口語體に進む橋であらはれ、將來の文章は口語體になるだらう。

私の記憶が誤つて居ないなら、新聞紙の論文を口語體で書いた最初の者は、私である。それは明治三十一二年頃のことだ、當時私は大阪毎日新聞の社長であつたが、私が論文に口語體を用ひた動

機は、講談を該新聞に掲載して好評を博したからであつた。講談を新聞紙に掲載したことも、恐らく私の毎日新聞が嚆矢であつたと記憶するが、私は其講談を讀んで、如何にも銑鍊された立派な純日本文と感じたので、之を更に一層上品にして、論文を書きたいと思つたのであつた。

口語體と言つても、野卑な語を用ひるのは宜しくない。恰も福澤先生が、文章語として俗語を取り入られたやうな細心な工夫を必要とするのである。近頃は口語體の文章が随分流行して居るが、まだく銑鍊が足らぬやうに思ふ。感激的の文章は漢文風が宜しく、口語體はダラシがなくて、緊張を失すると云ふ感じがあるのは、畢竟口語體文章の銑鍊が不十分な結果だ。口語體の文章の根本的に、然う云ふ缺點があるのではない。漢字を交へ用ひれば讀み易く、假名文字だけで書いたものは讀み難い、と云ふことも、要するに假名文字に適する文章を書かないからである。昔の草双紙は、假名文字だけで書いてあるが、あれは毫も讀み難いと感ずることはない。是れは其文章が假名文字だけで書いても、讀み易いやうになつて居るからである。假名文字だけを使用することになれば、言葉が其れに順應し、羅馬字を使用することになれば、亦言葉が其れに順應するから、讀み難いと云ふことは、一時のことである。口語體の文章も、一般に其れを用ひることになれば、聽て文章が其れに順應して、緊張味もあるやうな工夫が出来るものである。

併し今日の複雑な言葉を、凡て假名文字で書くと云ふことは、一時困難で不便であるから、私は

毎日新聞に居た時に、新聞の記事は漢字で書かなければ意味が間違ふと云ふ言語であらざる限り、成るべく假名で書くやうにした。名詞及び漢語から出た動詞を除けば、假名で書いて読み難いことはない。殊に助動詞を漢字で書く如きは、愚の骨頂である。例へば「可からず」とか「何々爲べし」とか、「可」「爲」と云ふ漢字は、何の要もないことである。此漢字節約は、主として印刷の便利から割り出したもの、即ち「可」とか「爲」とか云ふ漢字を用ひて、更に振假名を附ける手数を除く爲めであつたが、一般的にも文章を書き、漢字を用ふる際に、モット考慮して、福澤先生の手数を除く取りて、今日に適當なる新文章を書かれんことを希望する。

(大正九年十月四日、時事新報)

井上毅氏は、和文系の能文家で、亦極めて漢文の素養があり、引締つた國文を書かれてゐた。氏がいかに福澤先生の文を評したかは、委しくは知らないが、石河幹明氏の福澤諭吉傳に、井上毅の評として、「韓蘇は愚か、孟軻以上の名文である、と人に語つたといふことである」と記されてゐる。餘人が先生の文章を評したのは、さまで傾聴に値ひしないが、梧陰井上毅氏の評言は、正に能く先生の文が流暢達意、平明輕快の美點を遺憾なく發揮してゐる所を見抜いたものである。

明治四十年六月十五日博文館創業二十週年紀念として、「太陽」増刊號に、明治名著集(菊倍版二段組五百十二頁)を發行した時、先生の「學問のすゝめ」を卷頭第一に掲げてをる。其他は西周の百一新論、

田口卯吉の日本經濟論、加藤弘之の人權新說、中江篤介の民約譯說、鳥尾得庵の王法論、井上哲次郎の倫理新說、馬場辰猪の天賦人權論、藤田茂吉の文明東漸史、伊藤圭介の救荒植物集說、坪内雄藏の小説神髓、外山正一の社會改良と基督教との關係、西村茂樹の日本道德論、徳富猪一郎の新日本之青年、中村正直の漢字不可廢論である。此等は明治社會を風靡した偉大のエッセイであるが、其中には、今から見ては陳腐に屬する嫌ひが無いでもないが、獨り先生の文だけは、今もなほ燦として光を放つてをるのである。

岩波文庫のシリーズに、福澤撰集がある。之には、福澤全集緒言、學問のすゝめ、帝室論、瘠我慢の說、明治十年丁丑公論、女大學評論、新女大學、時事論集とを選び載せた。此等は何れも永久に社會人心を指導するものである。改造社の現代明治文學全集には、明治開化期文學(第一編)に、唯先生の文としては「かたわむすめ」一篇を掲げたのみであるが、其れは唯文藝といふ方面からの見方で、先生の論文が、明治文壇に一大貢獻をなした事は餘りにも明白な事であるから、改造社の文學全集には、先生の論文を掲げなかつた事とおもふ。

ともかく、明治三十三年小學校令改正後、國語國文の勃興は目醒しいものがあつたが、中等教科に於ける國語讀本といふものに、國文の標準となるべきものが未だ確定してゐなかつたので、多くは徳川時代の和漢混和文の抄録を羅列したものに過ぎなかつた。其時恰も明治書院から落合直文先生の中等國語

讀本が現はれた。之が當時の中等教育の國語界を風靡したものである。その第一、二、三卷には、所々に福澤先生の文章が掲載された。

抑も落合先生は、吾が恩師であつて、常に御宅に出入して、國文談を聞いたものであるが、先生は汽車の中でも、宴會の席でも、和歌と文章の推敲鍊磨に腐心されてゐた事は、屢々承つたのである。而して天下を風靡した中等國語讀本（明治三十二年初版）に採録された文は、念には念を入れ、選りに選つて掲げられたものである。而して福澤先生の文を採録されるに就いても、嚴正な選擇が行はれたのだ。

落合先生は、どちらかといへば國粹派の方であつた、隨て古典的和文的を好まれたのであるが、さて愈々中等國語教科書として、國文の模範的なものを定めるには、古典的和文的では、實際の社會に遠ざかつた事になるので、熟慮の末、福澤先生の文が實際的實用的で、而かも語句の洗鍊、文意の明快といふ點に缺くる所がないので、落合先生の讀本に、福澤先生の文章が掲げられた譯である。此の讀本が天下を風靡したのは、單に福澤先生の文が載せてあつた爲だと言ふのではないが、あれ程文章の選擇にやかましく、少しでも疵のある文章を採られなかつた落合先生が、その讀本に福澤先生の文を比較的多く採録されたといふことは、一面に於て古典的固陋と見られがちの落合先生には、他の一面に進取開明の所があり、又頗る公平に判斷し、「標準國語」としての福澤文」を評價する見識を持たれてゐたことに、敬意を表する。

三 先生の文章の底に流れてをるもの

1 愛國の熱情

先生の文章は極めて平明輕快であるが、読み去り読み來る裡に、一種の威壓と迫力とを感ずる。それは何故であるかといへば、愛國の熱情が、その文章の底に流れてをるからである。

維新前後の憂國の志士、所謂燕趙悲歌の士は、その言ふ所慷慨悲憤であるが、それは多く詩歌文章の文字の現はれた丈けの力しか感ぜられない。先生が此等の保守派と闘つて、新文明の鼓吹に椽大の筆を揮はれたのは、敢て虚飾的美辭秀句ではなく、その語句文章は極めて平易であつても、眞に憂國の至誠から湧き出た、指導的、啓蒙的、教訓的の一大文章であつたのだ。福澤全集のいづこを讀んでも、その底に流れてゐるものは、憂國の熱誠である。

わけて帝室論に於て、その憂國の至情が最も高潮に達してゐる。今余が小論文に於て、唯一つの帝室論に就て、その一端を開陳してみよう。

「我日本國民は帝室に對し奉りて、過去の恩あり、現在の恩あり、今後國會を開設して政黨の軋轢を生ずるの日には、必ず其緩和の大勢力に依頼せざるを得ず、即ち未來の恩にして、此三様の大恩は、日本國民たる者に於て、平等に戴く可き者なり」とある文を讀むと、大乘本生心地觀經の「世間之恩有四

種、一父母恩、二衆生恩、三國王恩、四三寶恩、如是四恩、一切衆生、平等荷負とある文を思ひ浮べる。「此三様の大恩は、日本國民たる者に於て平等に戴く可き者なり」の文句は、「一切衆生、平等荷負」の語から採られたかの如き感をなすのであるが、愛國の至誠は、洋の東西を問はず、古今一徹の名句を暗合せしめるものである。

「前節の論旨に於て、帝室を仰で學術の中心に奉せんと記したるは、我日本の學問をして、假令ひ其主義は之を西洋近時の文明に取るも、之を取て以て遂に獨立すること、今の漢學が其源を支那に取て、遂に我國に獨立したるが如くならしめんと欲するの趣意にして云々」の文章を讀むに、先生の獨立自尊は、單に個人の獨立自尊のみに留らず、進んで日本國家の獨立自尊であるべきことが、明示されてをる。換言すれば、日本國家の獨立を鞏固ならしめる爲に、西洋文明を攝取するのである。此理を推して論せば、英語獨逸語などを學ぶのは、日本國家の獨立自尊を成就するの方便で、外國語の學問其物が難有いといふ譯ではない。それは過去の日本人が、支那の漢學を學んで、日本の獨立に資したやうに、洋語を習ふのも、只偏に日本の獨立自尊の爲であることを教訓なされたものと思はれる。

更に此理を推して考へると、日本語の獨立自尊は窮極の目的であり、國語國文だけで、洋語の力を借りなくても、日本の學術文明が、世界の諸文明國に負けないやうになることが、國家の獨立、國語の獨立の上に期せられねばならぬ。今はその目的の爲に努力しつゝあるのだ、と云ふことを教へなされたも

のと解せられる。先生の議論は、當座の場當りでなく、國家百年の大計を見越しての卓見であるから、近視眼的の小國語學者の國語尊重の議論とは、日を同じうして語るべからざる者がある。

「舊來我國に固有する文明の事物を保存せんとするの一事にして、又重ねて帝室に依頼せざるを得ざるなり。……日本固有の技藝にして、今日これを保存せんと欲すれば、其事難からず、之を放却すれば、遂に其痕を絶つの恐あるもの即是なり。……無用の藝術を保存するに、有用の心思を勞し、又隨て多少の金を費すは、全く無用の事なりとの説あれども、其人は誠に今日の人にして、明日を知らざる者なり。人間の文明は、其日月永遠にして、其の境界廣大なる者なり。文明一跳、千歳一日の如し、豈に目下の無用を以て、千歳文明の材料を棄ることを爲んや」と書かれ、茶湯、插花、薰香、書道などの固有文明を保存すべきを述べられ、滔々數千言、悉く過去日本の文化藝術を賞揚せられてをる。論者の中には、動もすれば先生を以て舊文明の破壊者の如く誤解するものあれども、其人は、即ちこの先生の帝室論の深遠なる文章を熟讀玩味せざるものである。

後に帝室技藝員が設けられ、日本美術協會が皇室の保護の下に建ち、各府縣の古社寺保存、國寶指定などが行はれるやうになつたのは、是れ全く先生の帝室論に述べられた理想の一端を實行したのに過ぎない。先生の論文は大なる豫言であり、又大なる理想である。而してその先生の日本舊文明舊藝術に對する保護獎勵の理想の全部は、未だ昭和の今日に於ても、實行されてゐないのである。大日本國家の隆

昌と發達と共に、漸次に先生の理想に向つて少しづつ、歩んで行くのである。先生の名論卓説は、正しく大日本帝國の發展を豫告した指導原理であるのだ。

先生は日清戰端を啓くに當つて、自ら衆に先んじて醵金に狂奔せられ、其の戰捷の結果を見て、眞に欣喜雀躍せられたことは、先生を傳した諸種の著述に普く紹介されてゐる。蓋しこれは先生が西洋近時の文明を、取て以て國家の獨立自尊に資せんとせられた、當初の目的の一部が實現した爲の悦びであつたのだ。

もし先生をして更に壽を永うして、日露戰役の際に在らしめば、先生の雄渾なる指導的言論文章が、天下の輿論を定め、人心の嚮ふ所を知らしめて、或は彼の屈辱的媾和に終らしめず、既に其の當時に於て、滿蒙獨立の快舉は出來てゐたかも知れぬ。先生歿後の日本に於ける、思想混亂、赤化思想の侵入など、憂ふべき國難が續出した時にも、天下を指導する先生の如き大文章家がなかつた爲に、遂に今日に及んだのではないかとも思はれる。學者文士、雲の如く林の如くありと雖も、何れもどん栗のせいくらべで、未だ一人も天下の人心を指導し啓發する人のないのが、先生歿後の日本の状態である。

宗教にせよ、教育にせよ、經濟にせよ、學者は唯之が報告的の論述をするのみで、社會人は偏にその行詰りを嘆き、いかにせばこの行詰りを打解すべきを明示するものが無い今日、我等は切に先生を追慕するのみである。

2 大悟徹底の人生觀

先生を誤解せるものに對して、先生の眞面目を説かうとした人の多い中に、余は島田三郎氏の文を以て最も勝れたものと思ふ。今其の抄録を次に掲ぐ。

福澤先生哀悼錄

島田三郎

三田の高臺に長嘯して天下の瞻望を維ぎ、一管の筆を揮ひて泰西文物を輸入し、三寸の舌を鼓して平民の氣焰を揚げたる當代の巨人、福澤先生逝けり、痛悼に勝ふべけんや。

先生は儒教を攻撃し、自活生業を稱道せしが、先生の行は却て儒教の旨に協へり。これ一見奇なるが如くなれども、決して奇ならざるなり。先生は形而上の考案に多くの思を凝らさず、専ら實踐躬行を貴べり。これ生を知らずして焉ぞ死を知らん、との旨に合するにあらずや。

この過渡の時機に會し、武士の理想的人物を罵倒して、以て一生を警醒せしもの、即ち有名なる楠公論にあらずや。これ楠公其人を撃つにあらずして、武士の舊想を撃ちたるもの。恰も一休の俗僧を打破せんが爲に、釋迦を罵りたる意に髣髴たり。

先生は知識を歐米に博採せしが、その行爲は幼時の儒學に涵養せられたるものにして、唯俗儒の範圍を脱したるに留る。

右の文は、慶應義塾學報第三十九號臨時增刊「福澤先生哀悼錄」には載せられてゐない。私はこの全文をば、明治四十四年刊、明治書院發行の落合直文編、森林太郎、萩野由之補、といふ中等國語讀本第八卷に於て見たのである。余は前に福澤先生の文を登錄した落合直文先生の中等國語讀本が、天下を風靡したことを述べたが、落合先生歿後、森鷗外博士、萩野由之博士の補としてあらはれた此の讀本も、亦永く中等國語教育界に、一大勢力を占めてゐたものである。而して島田氏の福澤先生を追悼せる文章は、初に先生の一代記を簡明に述べ、次に先生の思想を評論したもので、當時の國語國文界における名文として、いたく賞揚され、隨て天下の中學生に、先生のいかに偉大なりしかを知らしめたものである。かの楠公論といふは、「學問のすゝめ」第七編の終に見える「忠臣義士が一萬の敵を殺して討死するも、權助が一兩の金を失ふて首を縊るも、其死を以て文明を益することなきは、正しく同様の譯にて云々」の句に基く。文中一語も「楠公」の文字なし、されど世俗は頻に楠公權助論と勝手に名をつけて、先生を攻撃したのであるが、先生の憂國的至誠、愛國的熱情は、素より辯明せらるべき程のものにあらねば、先生はこの喧々囂々たる非難の裡に、平然として驚かず、明治七年十一月七日朝野新聞に、「慶應義塾五九樓仙萬」の名を以て、之が駁論を寄書されたのだ。その御苦勞千萬の洒々落々は、先生の大悟徹底の人たるを示すものではないか。かゝる場合にかくの如きウィットは、常人の企て及ぶべき所ではない。

「佛教」雜誌第一七〇號に、山田湖南氏が「福澤翁の希望」と題して書けるもの、最も余が意を得たものである。

翁が數十年來佛教及び僧侶に對して口を極めて罵倒したことは、紛れもない事實である。しかしその極力罵倒したのは、佛教其物、僧侶其物を破滅させるのではなく、佛教の腐敗したる部分、僧侶の墮落したる徒輩を排撃して、醇粹なる僧侶を打出し、眞正の佛教を發揚せんとの考であつた。

總じて、一方に曲つた物を矯正しようとするには、中央の處まで引き矯めても、眞直になるものではないから、是非とも他の一方へ曲げ付けねばならぬ。丁度達磨が梁武に對して「廓然無聖」「無功德」と云ひ、丹霞が木佛を焼いて尻を炙り、大慧が其師圓悟の『碧巖錄』の版本を一炬に附して焼いた、と同じやうなわけである。

先生の文章は、その文字の文面に現はれた丈けでは理解されないものがある。それはその底に大悟徹底的の眞意が深く藏せられてゐるからである。先生はその自傳に於て、幼時父上から坊主になれと云はれたことが最も嫌であつたことを記され、又「青ハ藍ヨリ出テ、藍ヨリモ青ク、僧ハ俗ヨリ出デテ俗ヨリ俗ナリ」の名句を吐かれ、「宗教は茶の如し」と茶化し、

抑も今の宗教には、佛教あり、耶蘇教あり、又その宗教の中にも、種々の宗派あれども、經世上の眼を以て見るときは、其相違は普通の茶と紅茶との違ひぐらゐにして、孰れを飲むも差したる相違

に非ず。

と極めて軽く宗教を視られてゐるが、先生自身が、實は宗教の悟道に到達した禪僧の如くである。

先生の文章の表面にあらはれてゐる語句の底には、宗教の真髓に透徹したものがあつた。それは私輩如き一小人の觀察ではなく、佛學の權威文學博士前田慧雲師の感想文に由つて之を證據立てることが出来る。次に掲げるものが即ち其れである。

福澤翁の人生觀

前 田 慧 雲

私がいつも此の人生といふことに就て感じてゐることは、福澤諭吉先生の言葉である。即ち「人生といふものを戯れぢやと思つて、眞劍にやらねばならぬ」と、申すことである。餘程味ひのある言葉、と私は思ふ。

これを喩へて見れば、碁打のやうなものぢや。私は、幼少の時から碁を打つてはならぬと、親から戒められてゐたので、今に碁は少しも知らんのぢや。けれども人が打つて居るのを見ると、馬鹿化た程眞劍であるやうだ。其の打つところの根本を考へて見ると、前に云うたやうに、戯れであり、暇つぶしであるけれども、打つといふ段になると、その全力を注いで、親の死目にも逢はぬかも知れぬといふ程に、眞劍になつてやるのである。

そこで人生といふのも、あの通りであらねばならぬと思ふ。碁を打つ時は眞劍になつて、全力を

一局に注いでやるけれども、打つてしまつた後になつてみると、負けても戯れであるから、さう頭を痛めない。勝つたと言つて、さう心底から誇るといふことでもない。即ち自分の生活上に關係するといふこともなければ、自分の名譽に關係するといふ譯でもない。勝つたところが、負けたところが、ほんの戯れであるから、其の時に勝つたものは愉快と思ひ、負けたものは残念と感ずる迄のことである。人生もさういふ按排式に見なければならぬかと思ふ。

人生は畢竟よく考へて見ると、戯れ同様のものである。夢の中の夢のやうなものであるけれども、夢ぢやというて、仕事もしない、戯れぢやというて、自分の勤もいゝ加減にしておくといふやうな事では、仕様がなない。戯れぢやと、心の底には締め括りをしておいて、人生の多寡を括つておいて、而して何事も眞劍にやらねばならぬのぢや。

商賣するにも、其の全力を注ぎ、百姓するにも、其の全力を注いで眞劍にやるのである。眞劍にやるけれども、若しそれを遣り損じたとか、失敗したとかした所で、心の底に多寡を括つて居るのであるから、つまり戯れであつて、遣り損じたところで、騒ぐこともなく、勝つたといつて、喜ぶ程の譯もなく、樂に通り返けて行くことが出来るのである。かやうな見地に立つて、人生といふものを送る氣になつたら、人生といふものは、都合よく愉快にやれて、仕事する人は、能くその効果を擧げることが出来るであらうと思ふ。人間畢竟するに、戯れやと思つて眞劍にやれ、といふ福澤

諭吉先生のこの一語に盡きて居ると思ふ。(雜記「弘道」)

これは福翁百話の第十「人間の心は廣大無邊なり」といふ文で、「人生は見る影もなき蛆蟲に等しく、朝の露の乾く間もなき、五十年か七十年の間を戯れて過ぎ逝くまでのことなれば」といふ書出しに初まり、「人生を戯と稱して、死も亦驚くに足らずと云ひながら、渡世の法に至れば、生を愛し、死を惡み、辛苦經營して快樂を求めよ、と勸む。前後不都合なるに似たれども、元來人間の心は、廣大無邊にして、能く理窟の外に悠然たるを得べきものなり」と斷じて、火災も病氣も、天然の約束だから、其儘に捨て置くわけにゆかざる理を説き、

人生戲と認めながら、其戲を本氣に勤めて倦まず、倦まざるが故に、能く社會の秩序を成すと同時に、本來戲と認むるが故に、大節に臨んで動くことなく、憂ふることなく、後悔することなく、悲むことなくして、安心するを得るものなり。

と論定せられたのである。是れ即ちあらゆる宗教が最後に到達すべき究極の眞理で、千部萬部の讀經に勝る、一大法悅の心境である。

一面眞相一面空 人間萬事邈無窮

多言話去君休笑 亦是先生百戲中

といふ詩が、先生の眞面目で、この詩趣を悟ることが出来るのは、大修行底の人ならではの能はぬ所で

あらう。

一面は真相にして一面は空である。實相は無相である。天台の三觀、即ち假觀と空觀とを止揚して、中觀の境地を説かれたのだ。煩惱即菩提にして、娑婆即光淨土である。

先生の人生觀は「戲去戲來自有真」の句に見える如く「戲即真」である。西諺に所謂 *Life is theatre* であつて、バイロンの謂ゆる *Life is the pendulum betwixt a smile and a tear* である。

演劇は戯れなれど、名優は最も眞劍の人である。觀世大夫は木賊刈の術を農夫に尋ね、團十郎襲名芝居に於て、與市兵衛となつた師匠は、定九郎役の弟子に舞臺で殺されるのを甘んじ、菊五郎の出世芝居といふは、彼が憎まれ役の高師直を演じ、觀客に撃たれて「難有う」の謝辭を述べたといふのである。人生の演劇は、各其役割に當つて、眞實眞劍であらねばならぬ。

福翁百話の第八に見える「善惡の標準は人の好惡に由つて定まる」とあるのは、嘆異抄に「善惡の二つ總じて以て存知せざるなり、其故は如來のよしと思召すほどに知り通したらばこそ、善きを知るたるにてもあらめ云々、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、皆もてそらこと、たはこと、誠なき云々」の法語と全く共通のものであらう。

孟子の性善説は、カントの良心説に似たる如く、荀子の性惡説は、ダーウインの進化論と共鳴する所あり、何れも善と惡との對立に於て、不徹底のやうに見えるが、蘇東坡の非善非惡は、禪の空即是色、

色卽是空の悟入に至れるが如く、而してこれが先生の人生觀の「戲去戲來自有眞」といひ、人生は戲であるが眞面目にやれとの教訓と合致するものではないか。

先生の揮毫の句には、全く禪僧の法語其儘の如きものがある。「公德由私德生」といひ、「先成獸身後養人心」といひ、「巧言令色亦是禮、溫良恭儉奈人侮」といひ、「大幸似無幸」といひ、「自由在不自由之中」といひ、「公平出不公平人」といひ、「伯夷其心而柳下惠其行」といひ、「物外有物、無心卽無物」といふが如く、雷喝喫棒、坐禪三昧の高僧にあらざれば、かくの如く大悟徹底の境地を味ふことは出來まいと思はれるのである。

それ故に、我等は先生が宗教を茶化し、僧侶を罵倒せられた文章を讀んで、その底に流れてをる實相無相微妙の法門を窺ふことが出來るやうに思ふ。

先生の戯れは「油斷大敵彼我忙々」といひ、或は自ら「三十一谷人」といひ、「慶應義塾五九樓仙萬」と稱し、又明治十一年の頃塾内に於ける登級試験に就て、塾生の間に関着が起り、其れが幸に大事に到らないで終つた時の狂詩に「四月試業大悶着、新法唯々又謬々、再吟味罷皆登級、先以千秋萬歲樂」といふのがある。そこに悠然として迫らず、洒落輕剽のウィットがあり、何事にも行詰らない、吹き抜ける思想がある。之はどう見ても、高德の禪僧の所爲、大悟徹底の善知識と認めないでは居れない。

先生の滑稽は、憂國的大不平の安全瓣ではなかつたか。先生の「公平ハ不公平ノ人ヨリ出ヅ」と言は

れたのは、實は先生自身の告白ではなかつたか。換言すれば、先生の熱烈なる公平の論文は、先生の憂國的大不平から爆發したものであるまいか。

先生は大悟徹底した曉に、獨り自らを清うして俗世を逃れる野狐禪ではなく、振り返つて國家社會を眺め、凡俗と伍して學商諭吉と罵られながら、救世濟民の文章家教育家と成られたのだ。是れ即ち眞の文學禪、教育禪と謂ふべきであらう。

如是我聞。觀音は三十三身に姿を代へて、衆生を濟度すといふ。先生は、大平民町人諭吉の姿と現じ、明治の當初、迷へる日本人を濟度せんが爲の、觀音の化身ではなかつたか。

先生の謂ゆる蛆蟲の如き我等が、敢て自分の好む所の禪定觀から、猥に先生を高僧に見立てようとするのは、即ち群盲象を評するの譏を逸れないであらう。固よりこの小論文は、最も小さい私の管見で、大に先生を見誤つた觀察であるかも知れない。

偶々、此稿を終らうとするに當り、「福澤諭吉と弟子達」といふ書があらはれた。その序文に、前學長林毅陸博士の「福澤先生の多角的な人格は、譬へば廬山の如し。種々の角度より之を眺むるに於て、始めて其の眞を捉ふるを得るのである」と書かれてあるのを見て、余が先生を觀察して高僧の如しと云つたのも、誠に八面玲瓏の多角的一大偉人に對して、眞に一小部分の一角を眺めたのに過ぎないことを、自ら恥づるものである。

唯私の言はんと欲する所は、先生の文章にあらはれたる字面の上の皮相觀察では、先生の眞意を知ることが出来ないといふこと。而してその文章は頗る平易簡明であるやうで、その底には測り知るべからざる一大哲理、一大人生觀が潜んでをり、通俗的實用的の國文でありながら、あらゆる佛教に共通した法喜禪悅の思想が含まれてゐるのではないかといふこと。而して先生の文章は、明治時代の國文の中で、表面平易に見えて、而して之が悟入に最も難解の者であり、吾が修行と吾が知識とが進歩するに隨て、初めて之を解し得たかの如く思はれるが、尙ほ更に修行し勉強しなければ、本當に先生の文章を解し得ることが出来ないものである、といふことを述べたいつもりである。勿論まだ修行中の小僧である私は、まだ眞に先生の文章を理解して居ないことを正直に告白しておくのであります。